性格であり，非農家の面からいえば，業種，職種は見分けがたく重複し，時には農業労働者として雇用されたいという，雑業化，農業（農村）化であった。これらの実証は，無論本書の重要な成果であるが，前工業化時代にあっては，農・工が未分化であり，職業・職種の専門化が進んでいなかったということはある程度当然のことと考えられる。すなわち，それをもって前工業化期の日本経済の特質であるとすることができるかどうかという印象がもたれるのである。むしろ強調されるべきことは，非農業化，農家の兼業化の程度（大きさ）であるように思われる。

各章の内容については，まず第3章において，田地2毛作農業の確立の条件として晩稲種の導入が取り上げられ，それは裏作麦の収穫期と水稲作の準備期をずらし，効率的な労働力の季節配分を実現するためのものであったとされる。しかし，本文中に示された労働力季節配分図（グラフ3—3）を見る限りにおいては，晩稲種の春期の労働需要のピークは，裏作麦のそれと重なっており，上記の説明には説得力が欠けている。本書にも指摘がある通り，晩稲種それ自体が多収性品種であったことがその普及の主要因であったように思われる。

また第4章では，山間部の畠作農業の前進性が反当たり収量の面から評価されるが，不耕作地が考察の対象外とされていること，主要畠作物である麦，粟においてはその反当たりの生産性は平野部に比べて劣っていることからすると，過大評価の感がもたれる。また近世後期における村落間の生産性の格差の縮小が，先進村の農法・技術の伝播の結果であるとされるが，農法・技術の伝播に関する具体的な実証が欲しかったところである。

第9章の飯料水準の分析においては，摂取熱量は1,800～1,900カロリーであり，比較的「高水準」のものであったとされる。しかし，本書の分析では食糧の歩留り率（可食部重量の総重量に対する割合）が考慮されていない。歩留り率は，米で約90%，麦類で約60～70%であったと思われるため，実際の摂取熱量は相当に（少なくとも80%程度は）下方修正される必要があろう。すると，当時の摂取水準は本書で強調されるほど「高水準」であったかについて，疑問の余地が生じることになるのである。

以上，本書の内容について，いくつかの要望，感想と疑問点について述べたが，それらは本書の価値をいささかも損なうものではない。著者と同様な問題意識で「注進案」を用いて，近代移行期の防長地方の地域経済の研究を進めている西川俊作氏の一連の研究[1]と合わせて一読されることをおすすめする。

〔注〕

1）西川俊作「長州・山口県の産業発展」（新保博・安場保吉編『数量経済史論集2　近代移行期の日本経済』日本経済新聞社，1979）30～48頁。

西川俊作「移行期の長州における穀物消費と人民の常食」三田商学研究25—4，1982，130～154頁。

西川俊作「18，19世紀における長州のプロト工業化」（安場保吉・斎藤修編『数量経済史論集3　プロト工業化期の経済と社会』日本経済新聞社，1983）184～196頁など。

（中西僚太郎）

山村順次　著：

『日本の温泉地——その発達・現状とあり方』

日本温泉協会　1987年5月

B5判　237ページ　1,800円

著者は，我が国の各地の温泉地に関して，温泉権や土地の所有形態および中央資本の導入の有無などに着目しつつ，その集落構造を中心として四半世紀余りにわたって究明されてきた。本書は，これまでの着実な実態調査に基づく研究成果を根底として，今後の我が国の温泉地の方向性について提言を試みたものである。

本書の構成は，次のようである。

序　章　温泉と温泉地の意義

第1部　日本温泉地の発達史

第1章　古代から近世末までの温泉地

第2章　明治期から昭和初期までの温泉地

第3章　第二次世界大戦後の温泉地

第2部　日本温泉地の現状とあり方

第4章　温泉地の現状分析

第5章　温泉観光の実態と志向

第6章　温泉地のあり方

終　章　よりよい温泉地域形成のために—むすびにかえて—

本書の内容をその構成に従ってみれば，序章は，世界各地の温泉との比較や地質学・医学の研究成果を踏まえるとともに，さらに歴史的背景に関しても

言及しつつ，我が国の温泉地の定義・分類・利用の推移および意義について述べている。

その上で，「地域環境を生かした個性豊かな温泉地が各地で成長すること」が重要であると指摘している。このような視座は，本書において首尾一貫しているところで，温泉地の研究を通して地域性とともに人間性の復権を追及する著者の立場の現れでもあろう。

第1部は，おのおのの時代における社会経済構造と関連させつつ，我が国の温泉地の発達過程について言及したものである。

歴史地理学の視点からある事象を究明する場合，史料の残存がその研究の成否を決定的にすることが多い。本書においても，統計資料の欠如する古代から近世あるいは明治期の分析にあたっては，『出雲風土記』『伊予国風土記』などの古風土記をはじめ，『有馬入湯記』『伊香保志』『滑稽有馬紀行』『摂津名所図会』『草津道中膝栗毛』『熱海独案内』など多くの紀行文や文学作品のほか村絵図を駆使して，当時の温泉の役割や温泉地の景観復元を実証的に究明している。さらに，古文書によって湯治客の生活の様子を明らかにするとともに，近世にあっては寺社の寄進の状況を，また明治以降においては旅館の宿帳を丹念に分析することによって，温泉地の入湯圏を確定している。そして，交通網の発達に伴う温泉地の変容に関しても熱海温泉を事例として言及し，昭和初期における「療養型」「保養型」「観光型」の温泉地の類型の地域的展開を究明している。

第2部は，全国の温泉地を「療養型」「中間型(観光>療養)」「観光型」「観光型（歓楽)」に類型化した上で地域的分布特性をみるとともに，大都市を中心とした温泉市場と関連付け，各類型の温泉地の産業構成や入湯客の特性などについて自らの実態調査に基づき明らかにしている。さらに，アンケート調査の資料によって現代のレクリエーション活動の実態を踏まえ，現代人のレクリエーション行動における温泉観光に対する意識・要求についても分析している。

このような，現代の温泉地の現状分析や現代人のレクリエーション行動の特性を踏まえた上で，医療としての温泉の役割や温泉への行政の推移を踏まえ，今後の我が国の温泉地のあり方について，温泉地の集落景観における建築物の調和，温泉地における共同空間の整備，保養設備の充実，長期療養地としての温泉地への対処，観光客の季節性にみられる偏在の是正の6点を提言している。

終章においては，「各温泉地の地域性，個性を地域住民自らが再認識し，それを全面に出した温泉地づくりに地域社会構成員をあげて取り組むべきである」として，今後の温泉地のあり方の基本的態度を指摘している。

本書を歴史地理学の方面からみるならば，ある史料が残存しない場合に，他の関連する事象の史料を併用しつつ，執ように個々の事実を蓄積しそのプロセスを究明していく態度は，その方法のみならず研究というものに対する立場・態度としても教えられることが多い。

さらに地理学においては，地理学そのものを無意味に狭く考えるとともに，現状の分析やその根底に横たわる規則性・法則の究明に終始し，現代社会に対する提言がほとんどなされていないことが，しばしば言われている。その意味でも，全国の温泉地の実態調査を踏まえた上での観念的でなく実現性豊かな提言は，地理学においてこそ可能な手続きであり，基本姿勢において本書が果たす役割は多大なものがあろう。

観光地理学の一分野である我が国の温泉地研究の成果として本書が読まれるとともに，研究の方法・立場・態度そしてあり方を学ぶについても良書である。さらに，観光地理学・歴史地理学に関心がある方々に限らず，地理学に興味のある人々にも，そして温泉地に引かれる若い女性観光客にも是非一読を勧めたい。地理教育の観点からみても，女性の「地理嫌い」の是正への一助にもなろう。

（古田悦造）